

令和 8 年 7 月 1 6 日

令和 7 年度 特別の教育課程の実施状況等について

栃木県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
足利市立東山小学校	足利市教育委員会	公立

1. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

本市全小学校において、平成 1 5 年度より取り組んできた英会話学習の内容と外国語活動・外国語科の内容を関連づけた独自の年間指導計画を作成し、「話すこと」「聞くこと」に特化した指導を行うことで、英語によるコミュニケーション能力の育成を図る。

必要となる教育課程の基準の特例については、「教育課程特例校編成の基本方針等について」を参照。

2. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

◎計画通り実施できている

・一部、計画通り実施できていない

・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

◎実施している

・実施していない

(3) 自校における評価

- ・第 1 学年から英会話学習を実施することで、A L T とあいさつを交わすなど、進んでコミュニケーションをとる児童の姿が見られた。英語による簡単なコミュニケーションに繰り返し触れることが、その基本的な能力の育成につながった。耳が慣れてきていると感じた。
- ・身近な場面を想定した英語でのやり取りや、季節に応じたアクティビティ等を第 1 学年から行うことを通して、英語での問いかけを聞いて自然と考える姿や、答える姿、ジェスチャーを使った表現などが日常でも見られ、英語に慣れ親しむことにつながっていたと判断できる。
- ・第 1 学年から英会話学習を実施する中で、外国語だけではなく外国の文化や習慣に触れることを通して、外国語や外国文化の特徴や外国ならではの季節の行事等に対する興味・関心を高めていた。また、外国にルーツのある人への偏見をなくすことにより効果があった。

(4) 学校関係者による評価

<児童>

- ・「学校の英会話学習に進んで取り組んでいますか。」という質問項目について肯定的に答えた児童が、1・2・5年生で83%、その他の学年でも70%以上であった。肯定的に答える児童の傾向として、低学年や高学年という年齢だけではなく学年学級としての授業への取組が関わっていると考えられる。
- ・ALTが頻繁に変更になり、児童は困惑した様子であった。楽しんで活動していた児童と、ALTの指導を受け入れにくく感じていた児童がいた。
- ・簡単な英語を使っている活動であったため、苦手な児童も英語に親しめていた。

<保護者>

- ・「学校の英会話学習を行うことで、英語によるコミュニケーションの基礎的な能力の育成につながっていると思いますか。」という質問項目について肯定的に答えた保護者が、70%を超える学年が多かったが、学年によっては約半数の保護者が「あまり思わない」と回答していた。
- ・「学校の英会話学習を行うことで、英語に慣れ親しむことにつながっていると思いますか。」という質問項目について肯定的に答えた保護者が、どの学年も75%以上であった。
- ・「学校の英会話学習を行うことで、外国語や外国の文化に対する興味・関心が高まっていると思いますか。」という質問項目について肯定的に答えた保護者の数が、約50%であった。「進んで取り組んでいる」と感じている児童との差異がある。

3. 実施の効果及び課題

<効果>

- ・進んでコミュニケーションをとろうとする意識が生まれる。
- ・異文化理解の土台がつくられる。
- ・日常的に英語表現やジェスチャーを使うなど、異文化への興味・関心が高まる。
- ・耳が慣れ、自然に発音・発声できる基礎につながる。

<課題>

- ・英語を使うことについて、苦手意識のある児童と意欲的に使える児童の二極化が見られる。
- ・授業で日本語が多く使われている。
- ・保護者の意識と児童の意識に差異が見られる。

4. 課題の改善のための取組の方向性

- ・英語を使うことについて苦手意識のある児童に対しても、楽しく学習ができるように活動内容を工夫する。
- ・クラスルームイングリッシュを職員間で共有し、積極的に授業の中で使うようにしていく。その際、ALTとも連携し、ネイティブな発音に触れられるようにする。
- ・ALTと学級担任とで相談を密にする中で、学級の児童に合った歌や体を動かす活動等を取り入れながら、興味関心をもって取り組めるように工夫するとともに、学校公開などでも積極的に授業を公開し、日ごろの取組を保護者や地域の方々にも見てもらえるようにする。